英国の「チャイルド・ケア」施策のあり方に関する一考察
－クレア・ブリトンが主張したソーシャルワーカーの立場を軸にして－

○　京都府立大学大学院　　板倉孝枝（会員番号 6400）

キーワード：クレア・ブリトン、疎開ホステル、チャイルド・ケア

１．研 究 目 的

本研究は、1948 年児童法で規定された英国の「チャイルド・ケア」施策に対するクレア・ブリトンの一貫した姿勢と考えおよびそれらを支える経験の由来について検討するものである。

英国の「チャイルド・ケア」とは、1948 年児童法において初めて規定された言葉であり、児童専任のソーシャルワーカーが存在した時期に使用された専門用語である。この「チャイルド・ケア」に深く関わり続けた人物がクレア・ブリトンである。彼女が「チャイルド・ケア」を強調したのは、その実践現場において児童専任のソーシャルワーカーを軽視する動きがあったためである。

では、もともとブリトンは、児童専任のソーシャルワーカーにどのような役割を期待したのだろうか。そしてその過程においてどのようにソーシャルワーカー養成コースであるチャイルド・ケア・コースに関わるようになったのであろうか。チャイルド・ケア・コースとは 1948 年児童法に先駆けて、カーティス委員会の中間報告において勧告されたカリキュラムに従って中央研修協会（Central Training Centre）の監督の下、実施されたコースであり、本研究の関心はこのチャイルド・ケア・コースがブリトンからどのような影響を受けていたのか、という点にある。しかし先行研究においては児童専任のソーシャルワーカーの存在はカーティス委員会の公式調査によってもたらされたものとされており、ブリトンによる影響は重視されてきてはいない。

そこで、本研究においては、ブリトンの目指していた児童専任のソーシャルワーカー像をチャイルド・ケア・コース下においてどのように具体化し、実現させようとしていたのかを明らかにすることを目的とし、検討を試みる。

２．研究の視点および方法

本研究は、これまでの先行研究においては注目されることのなかったブリトンと児童専任のソーシャルワーカー誕生との関連の中でも特に、ブリトンの経験に基づく考えがどのようにチャイルド・ケア・コースへと反映されたのかに焦点を当てて検討する。そのため、児童専任のソーシャルワーカーの必要性が勧告されたカーティス委員会報告内容の詳細について国会での議論も踏まえたうえでの検討を試みる。また、ブリトンが実際にどのような実践を経験し、児童専任のソーシャルワーカーを必要と考えるに至ったのかについて考

察する。その際、ブリトンは自身の受けた教育とチャイルド・ケア・コースとにどのような変化を与えたのかという点についてはチャイルド・ケア・コースのシラバスなどをもとに検証する。加えて、ブリトンがそれまで実践現場で問題を解決してきた経験から得られた成果を教育現場へと還元した過程を捉えて、その時期の彼女の教え子の証言などを参考にしながらソーシャルワークにおける実践・教育間の成果の相互フィードバックについて分析することを試みる。

３．倫理的配慮

本研究は、英国の図書館に所蔵されている未出版の博士論文なども資料として活用している。これらの資料については著者が亡くなっているものに関しては、その家族の許可を得られたもののみを利用することとした。そのため、中には、報告者が実際に資料の裏付けを持っていたとしても、公開については不可能な資料も含まれている。また、1947 年当時に開講されたチャイルド・ケア・コース在籍のブリトンの教え子等から提供された資料も活用している。これらの資料についても提供者本人の許可を得られたもののみを用いた。

４．研 究 結 果

本研究は、以下の 3 点を明らかにした。

① ブリトンは、戦時疎開事業を通して浮上してきた子どもの問題を仮に平時であればどのような状態の子どもの問題に当たるのかということと照らし合わせながら、平時においても変わらず効果をもたらすであろう支援のあり方を模索していた。だからこそ、戦時疎開中に出会った疎開ホステルの子どもたちに対して一貫したサービスを保障するということに終結し、戦時疎開終了後にもその支援を継続して行った。

② ブリトンは、子どものニーズの充足のためには、児童専任のソーシャルワーカーの存在が不可欠だと考えていた。疎開ホステル実践を通して、ブリトンはそれまでの方法では子どもの問題行動の原因を当事者である子どもの視点に立って捉えることはできないと考えていたのである。そうした考えを持っていたからこそ、チャイルド・ケア・コースが開講された当時、彼女はその中心的存在として一目置かれるに至ったといえる。ところが、そのチャイルド・ケア・コースが他のソーシャルワーカーのコースと統合されるという形で新たな専門職として確立されていく中で、ブリトンは、中心的位置からは外れていくこととなった。

③ ブリトンは、「チャイルド・ケア」施策において児童専任のソーシャルワーカーを必要としていたが、単にその誕生が実現するだけでは十分ではないと考えていた。社会の情勢は日々刻々と変わり、子ども達自身の状態も同様にその時々で変化していくものであるため、その誕生に加えて、常に教育と実践の連携および相互間で循環が不可欠だと考えていたのである。